

「一笑一顰—日本絵画に描かれた顔—」展によせて

「引目鉤鼻」で描かれた顔

「一笑一顰」は、『韓非子』という書物に出てくる「明主は一顰一笑を愛しむ。」という言葉がもとになっています(内儲説上)。賢明な君主はちょっとした表情を見せることさえ惜しむものだ、といった意味で、ここから、わずかな表情や仕草のことを一顰一笑あるいは一笑一顰と言うようになりました。

今回の表紙になっている依屋宗達筆「伊勢物語図色紙 六段 芥川」(当館蔵)など、日本美術では目を墨線で細く表し、鼻もひらがなの「く」の字のように単純化して微妙な表情を表す場合があります。江戸時代に活躍した依屋宗達とその工房では、古い時代の絵巻類に学びながら絵画制作が行われていました。例えば依屋宗達筆「風神雷神図屏風」(建仁寺蔵)は鎌倉時代の「北野天神縁起絵巻」に登場する雷神が参考にされている可能性が知られています。「芥川」に見られる「引目鉤鼻」と呼ばれる顔の表現も、平安時代の絵巻などに見られる古い表現技法のひとつです。著名な例では、「源氏物語絵巻」(徳川美術館蔵)の登場人物たちは基本的にこの顔で描かれています(図1)。

このような表現が行われた理由として、「引目鉤鼻」が盛んに用いられた平安時代の人びとの理想が反映されていることがまず挙げられます。清少納言の書いた『枕草子』には、藤原行成が語ったという「目は縦長で、眉は額の方に生えあがり、鼻が横に広がっていたとしても、ただ口元が可愛らしく、あごの下や首がきれいで、声が悪くない人だけは好ましい感じがする」という言葉が記されています(46段)。好みでない顔について述べた前半部分とは対照的な、「引目鉤鼻」による細く横に伸びた目やすっきりとした鼻は、平安時代の貴族にとって好ましい顔だったのでしょう。

このように形式化された顔の描写は決して豊かな感情表現とは言えず、登場人物の状況を理解し、想像しながら鑑賞することが要求されるような難しさもあります。一方で、物語を読みながら人物の顔を眺めていると、単純化された造形のなかに奥ゆかしい感情が秘められているように見えてきたり、たったひとつの場面に揺れ動く気持ちを読み取れたりする楽しさもあります。顔から強すぎる個性や表情を無くすことによって、見る人が理想や想像に沿った姿を絵の

なかに投影できるようになっているとも考えられるのです。

ところが、さらに目を凝らして「引目」を見てみると、単なる一本の線だけではない場合も多いです。先に例に挙げた「源氏物語絵巻」について、宮次男氏は「一線に引いたとみられる目も、実は細い線を幾本も引き重ねて微妙な調子を出し、さらにひとみをやや濃い墨で点じて生命力を与えている。」と述べています(『絵巻入門7 引目鉤鼻』『日本美術工芸』396、1971年)。また、当館蔵の「寝覚物語絵巻」(平安時代、図2)や「源氏物語浮舟帖」(鎌倉時代、図3)で、同様の表現がなされていることも指摘されています(宮崎も『名品鑑賞3 大和文華館の物語絵』2014年)。

さて、時代を下り、再び当館蔵「伊勢物語図色紙 六段 芥川」に戻ります(図は表紙をご覧ください)。本作でも、目は単に墨線を引くだけでなく濃墨を点じて瞳を表しています。瞳の位置を明確に示すのは、人物の視線の方向に注意を払いつつ制作がなされたためでしょう。宗達工房周辺の作と見られる伊勢物語図色紙は、他に数十面の存在が知られていますが、本作はそのなかでも比較的明瞭に瞳を表す部類に含まれます。現存する伊勢物語図にも芥川の場合を描く作品は多くありますが、二人が見つめあうのは本作とその制作の参考元と見られる「異本伊勢物語絵巻」(原

本は鎌倉時代と推定されています。東京国立博物館蔵)のみです(青木賜鶴子「解説」『宗達伊勢物語図色紙』伊勢物語絵研究会編、2013年)。

当館蔵「芥川」では、女の顔の周りに配置された濃い色との強烈なコントラストによって、白い顔へ、そしてその表情へと鑑賞者の視線を誘う工夫がなされているとの指摘(中部義隆「伝宗達筆伊勢物語図色紙研究序説」『琳派第四巻「人物」』紫紅社、1991年)もなされています。二人の顔は一見、慎ましくやかな平安貴族の顔つきに見えますが、一瞬の視線の交錯に二人の熱情が鮮明に表されているのです。

清少納言は、「人の顔のきれいな部分は何度見てもよいけれど、絵画は何度見ても見飽きてしまう」といったことも書き残しています(252段)。確かに実際の人の顔とは異なり、絵画は刻々と変化していくものではありません。しかし、「引目鉤鼻」の用いられた絵画では鑑賞者に想像の余地が残されており、見るたびに印象が変わるかもしれせん。人の顔をじろじろ見ていると嫌がられますが、絵画は見られるために工夫が施されているものなので、ぜひ、描かれた顔に何度でも向き合ってみてください。

※図1は『日本の絵巻1 源氏物語絵巻 寝覚物語絵巻』(中央公論社、1987年)より転載しました。



図1



図2



図3

季刊 美のたより No.219

令和4年7月1日

発行 大和文華館